

【報告】

市民と博物館・学校・行政の連携による新しい地域文化づくり
—千葉県野田市における童謡作曲家山中直治の復活の軌跡—

A Creation of a New Community Culture by Working in Closer Cooperation
with the People, Museum, Schools and Administrative Office
—A Report of Revival of Yamanaka Naoji, a Nursery Song Writer, in Noda,
Chiba Prefecture—

金 山 喜 昭*
Yoshiaki KANAYAMA

Abstract: Museums seem to take on the character of ‘a sanctuary of culture’. They plan exhibitions or lectures by their own without paying attention to what the local community want museums to do. However, museums in present society should provide cultural activities, with overlooking from an ordinary point of view, to a community, sharing topics and views with local people. This paper reports that the museum in Noda creates a new community culture with the people, which seems no examples among Japanese area museums until now. Since the acquired articles left by Yamanaka, the museum have researched of him and obtained a variety of results. Generally, when a research is finished, a museum provides people with its results as a special exhibition. However, a special exhibition as a turning point, the museum took the first step of making Yamanaka’s songs popular among the people in Noda, from children to elderly people. A significant factor to success the museum plan is that obtaining cooperation from children and people in Noda from the beginning, such as recruiting volunteers for a Yamanaka’s songs concert in the period of the special exhibition. After that, not only schools and the Noda people but also the administrative office made effort to popularise Yamanaka’s songs in anywhere independently and enthusiastically. The museum also made a plan of a permanent exhibition and displayed series of Yamanaka’s nursery songs. Namely, a ring of cooperation in Noda is expanding and, at the moment, more than 80% of Noda people recognise his songs. The activity of popularisation of Yamanaka’s nursery songs as a local social education has accelerated communication among the Noda people. Moreover, those who joined the activity of popularisation recognise self-awareness and responsibility. The Yamanaka’s nursery songs have been introduced to the school education and children join the activity with adults. This activity has yielded a new education style, ‘cultivation of children by a region’.

* 野田市郷土博物館長補佐

平成14年1月25日受理

はじめに

千葉県野田市は全国的に醤油の町として知られる。醤油生産は、江戸時代から旧野田町の地場産業として発展した。現在の野田市は、1950年と57年に旧野田町と周辺の5村が合併して成立した。人口は約122,000人。近年は都市化の影響により、市外からの新住民の割合が次第に増えるようになっている。旧住民と新住民の割合が1983年（人口約10万人）には、5：5であったのに比べて、2000年（人口約12万人）には4：6となり、新住民が旧住民を上回るようになった。それまでの地縁や血縁関係で維持された地域社会から、都市型の新しい地域社会への過渡期にあたっている。人口増加に伴い、市立の小中学校も1976年には、小学校9・中学校7校であったが、現在は小学校16校・中学校8校となっている。

この実践報告は、野田市郷土博物館で開催した特別展において、これまで歴史的に埋もれていた山中直治という地元の童謡作曲家の人物像や作品を掘りおこしたことを契機として、その童謡を普及するために地域の人たちが連携の輪を広げて、市民文化運動にしていく経過を述べるものである。

その理念は次の通りである。都市型の新しい地域社会に変貌する状況のなかで、旧来の地域文化や伝統だけにこだわらず、市民自らが文化創造の担い手となり、新しい地域文化づくりに参加することで、コミュニケーションを促進し、民主主義社会の基盤となる人間としての「個」の確立につなげていくことである。

1. 博物館で特別展「よみがえる山中直治童謡の世界」を開催する

山中直治は、1906年に千葉県東葛飾郡梅郷村（現野田市山崎）に生まれた。子供の頃に音楽に憧れ、千葉県師範学校に入学して音楽を学び、卒業後の1925年に野田尋常高等小学校（現野田市立中央小学校）の教員になった。教育活動のかたわら童謡の作曲活動を活発に展開し、その作品が30曲以上もレコードになった。当時の童謡音楽界の一翼を担っていたが、惜しくも1937年に31才の若さで亡くなったこともあり、作品はその名と共に長く歴史の中に埋もれてしまった。

(1) 直治の遺品が博物館へ寄贈される

直治の遺品類は、没後全て処分されたといわれてきた。ところが1993年に生家から楽譜ノートやレコードなどの遺品が発見された。その後、遺品は博物館に寄贈された。

私の元来の専門分野は考古学であることから、それまでに発掘調査や考古学の特別展などを手掛けてきた。だが、当館のように学芸員2名という小規模な博物館では、自分の専門領域の仕事だけではすぐに行き詰まってしまう。地域の歴史や民俗調査以外にも、1991年には明治時代の押絵や絵画の特別展を実施したり、翌年には明治期の浮世絵の特別展など、専門以外の分野を最初から勉強して基礎知識を習得し、専門家から話を聴いたり、自ら調査研究しなければならない。医者に例えれば、大病院の医者は専門ごとの研究や治療を担当する。国立や県立などの大規模博物館でも同じように専門分野ごとに研究員が配置されている。しかし、市立などの地域博物館は町医者と同じように一通りの専門領域をこなせなければ通用しない。市民の相談役となり、場合によっては調査研究してその成果を地域の人たちに社会還元するのである。

そこで、今度は童謡の勉強をすることになった。専門書にあたって童謡の歴史的な変遷を基礎知識とした。次に直治の遺品類を整理分類した。なかでもノートやガリ版などの譜面を丹念に記録して整理したところ、直治は220曲以上の作品を手がけたことが明らかになった。当時発表したものもあれば、未発表のものもあり、いずれも現在は歌われなくなった作品ばかりである。譜面を見ると作詞家にも様々な人たちがいる。野口雨情・斉藤信夫・島田芳文・林柳波・富原薫など数十人におよぶ。周知のように、斉藤信夫は「里の秋」、島田芳文は「丘を越えて」、林柳波は「お馬」「海」、富原薫は「汽車ぽっぽ」などの作詞者として知られる。いずれも故人となっている。さっそく、雨情の子孫の野口不二子さん、信夫の娘の好枝さん、芳文の夫人の吉田昌代さん、柳波の娘の山田小枝子さん、薫の夫人の芳子さんら多数の関係者の自宅に伺い、本人のことや直治との交流関係などを調査した。特に千葉県成東町の斉藤さんの自宅では、直治が信夫にあてた多数のはがきを確認できたことから、二人の交流の様子が判明した。

また、小学校教員としては、野田市立中央小学校で保管する関係書類を調べたり、教え子や同僚教員だった人たちからも話を窺うと、直治は美男子で背が高く優しい先生だったという。100才になる同僚教員の中村文さん（故人）は、音楽好きな人で、先生方は放課後になると音楽サロンを催し、そこで直治はよくピアノを弾いて新作を聴かせてくれたという。当時校長だった松山隆も音楽好きで、直治の音楽活動の良さ理解者であった。こうして調査は、千葉県内各地や東京・静岡など各地を巡り、1年余りかかった。

(2) 特別展の計画

特別展の目的は、山中直治という童謡作曲家がいたことを市民に知ってもらい、作品を市民に普及することである。その為には、これまでの一般的な博物館の展覧会のように、調べた情報を一方的に来館者に提供するスタイルでは成功しないことが予想された。全国の博物館の特別展をみると、「やって終わり」という過性の企画が多い。しかし、これからは展覧会を契機として地域の文化や教育にどのような貢献が果たせるのかを具体的に提示していくことが必要である。社会が成熟化すると、これまでのような牧歌的な博物館のあり方は見直しが迫られる。よって、直治の童謡は、地域の新しい文化資源になるという発想に立ち、それを市民自らが普及の推進役となる、つまり市民参加によって新たなコミュニケーションの促進をはかることを目標にした。

特別展は、その為のまず第一段階である。童謡を題材にする企画は類例があまりないので、どのように市民に情報を提供すれば効果的なのかを考えた。さらに市民参加を導入して、その後の普及の推進役になってもらうことも考慮した。そこで、特別展の構成は「見るアプローチ」と「聴くアプローチ」を複合させ、それぞれにボランティアによる市民参加を導入することにした。

「見るアプローチ」は、次のようになる。展示は、調査研究成果の情報を市民に提供して直治の生涯や交遊関係、音楽家や小学校教員としての直治のプロフィールの理解を促す。図録は、東京学芸大学の澤崎眞彦教授に直治の業績を近代音楽教育史上から評価をしていただいた。私も調査研究により判明した直治の生涯や業績を紹介した。また、直治を直接知

る、実子・小学校教員の同僚・教え子などの人たちによる思い出を掲載したり、直治の未発表の作品17曲の楽譜も掲載した。それにポスター・チラシも作成した。

「聴くアプローチ」は、まず展示会場に直治の童謡をBGMとして流すことを考えた。制作には、市内の音楽バンドのメンバーである、山崎健一・奥住淳・平井賢吾さんが協力してくれた。彼等は、コンピュータミュージックを手掛けていることから、直治の童謡の再現には、単に原曲を再現するばかりでなく、作品ごとに変化をつけたり現代的な感覚でアレンジを加えて、彼等のセンスを尊重して自由に作業してもらうことにした。

もうひとつはコンサートである。しかし、コンサートの実施には出演料・会場借用料・諸経費がかかる。だが、その為の予算は皆無であった。この問題を解決するために、出演者は住民ボランティアを採用した。しかし、また新たな問題が生じる。ボランティアは誰でもよいということではなく、入場者に感銘を与えるために、一定の音楽水準を有することが前提となる。そこで、まず直治がかつて教鞭をとっていた野田市立中央小学校合唱部の子供たちや、住民サークル「童謡を歌う会」の人たちに参加してもらうことにした。演奏者も知人に依頼して賛同が得られた。

住民ボランティアの活用は、単に予算の問題解決策ということではない。学芸員の能力には限界があるところを市民に協力してもらい、市民の出番をつくることで社会参加を促すことである。それは、その後の普及活動にもつながっていく。その理由は、地域の童謡を育成するためには、その地域の人たちが主体者となり参加することが必要だからである。プロの音楽家に委託すれば、確かに水準は高いものができるだろうが、地域に対する思い入れもなければ、一過的で終わりがかねない。ところが、ボランティアとして参加した市民たちは、その後に演奏を継承する機動力になってゆくのである。

(3) 特別展の実施

展覧会（写真1）

展覧会は、1996年10月15日～11月17日の約1ヶ月間に野田市郷土博物館において実施した。会場は、直治の生涯や業績を評価するコーナーと、直治に所

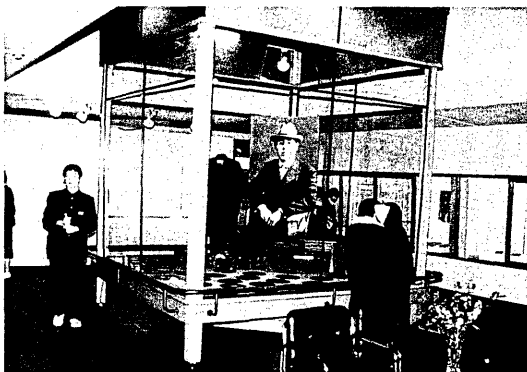


写真 1 展覧会の様子

縁の作詞家たちのコーナーの2部構成からなる。前半は、「山中直治の小学～師範学校時代」「小学校教員としての山中直治」「童謡作曲家としての山中直治」「山中直治の音楽に関する品々」「未刊となった第2集個人童謡曲集」の展示コーナーを設けた。後半は、直治に縁の作詞家として、野口雨情・北原白秋・林柳波・島田芳文・斉藤信夫・穂積久などのプロフィールや関連資料を紹介したり、特に斉藤信夫のコーナーでは直治から寄せられたはがき類を展示した。

来館者は5,630人にのぼった。来館者にアンケート調査を実施したところ、850人（回収率16%）から回答を得ることができた。それによれば、小・中学生（35%）、20代（3%）、30代（6%）、40代（14%）、50代（16%）、60代（16%）、70代以上（6%）である。来館者の居住地は野田市が8割近くで圧倒的に多い。市外では近隣の柏・流山・松戸市が順次多く、東京、埼玉、茨城方面からの来館者もみられた。

また、山中直治に関する設問と感想である。（設問）「山中直治は、昭和初期に活躍した野田の童謡作曲家ですが、彼の音楽は全国的にも高く評価されていました。そうした人物の存在や作品をお知りになりどの様に思いますか？」

（回答）「誇りに思う／愛着を感じる／感心する／理解できた／興味ない／その他」

これを、野田市内と市外の人とを分けて見ると、野田市民では「誇りに思う」が最も多い。これに対して、市外の人では「感心する」が最も多い。この違いは、野田市民には同じ地域の人間として時代性

を越えて直治に親近感を抱き、その業績を評価して心で感じるものがあったためかもしれない。しかし、市外の人にはむしろ歴史上の人物として客観的にその業績を評価している。

更に市内の人たちの印象を年齢別にみる。それによると、小・中学生では「感心する」が顕著であるものの、年齢が高齢化するに伴い「誇りに思う」「愛着を感じる」という回答が多くなる。一般に年齢が高くなるにつれて野田の在住年数も増すことから、在住年数が多く高齢化するにつれて、そうした価値観の生成が顕著であることが理解できる。

また、来館者の具体的な感想は次のようである。小・中学生の傾向は、「山中直治の名前を初めて知り、作曲家としての仕事ぶりに驚いた」「山中直治は31才という若さで亡くなりかわいそうに思う」「このような人物がいた郷土・野田に誇りを感じる」「山中直治が中央小学校の先生だったということを初めて知って驚いた」「山中直治の歴史が理解できた」というものである。

それに対して、高齢者の反応はやや異なる。直治の教え子だった人達は、当時を回顧してほぼ一様に懐かしさを示す。その一例を原文のまま紹介すると、「たいへん懐かしく遠い昔を思い出します。その頃に教わった吉岡先生、前田先生、渡野辺先生などなど。江ノ島の一泊旅行、軍艦三笠の前の写真等、今も險に映ります。唱歌の時間に山中先生に習ったこともありまして」（男性76才）、「幼い頃に教わった歌が山中さんの歌とは思わなかったし、知ったときは感無量」（男性68才）、「担任であった私の先生がみんなの先生になったような嬉しさを感じました」（男性72才）。これらの人たちは、一様に感動している。

生誕90年山中直治童謡コンサート（写真2）

コンサートは1996年10月26日に市内の興風会館大ホールで開かれた。ここは直治が1933年に初めてコンサートを開いた場所である。入場料は無料。出演者は、中央小学校の合唱部の子供たちや、主婦らを中心とする音楽サークルのメンバーや、商店主・音楽教室の教師などからなる。

コンサートは、2部構成で、合間にはスライドとナレーションで、直治のプロフィールや生涯を解説した。プログラムは、野田市教育委員会の黒川浩教



写真2 生誕90年山中直治童謡コンサート

育長が開演の挨拶をした後、「こんこん小山の白狐」（作詞：野口雨情）など全22曲が演奏された。

入場者は、500名を超す盛況ぶりであった。そこで入場者の感想をいくつか紹介する。「昭和8年から63年ぶりに、この様と同じ場所でコンサートが開かれたことは大変素晴らしいと思います。そういう意味でも今日の会は本当に素晴らしく深い感銘をおぼえた次第です」（女性69才）、「現在の世の中ではあまり童謡が聴けません、久しぶりの昔にかえったように感動しました」（女性63才）、「童謡が歌われなくなった今の子供の世界と重なり合わせて聴いていました。一時の素晴らしい空間でした」（女性59才）というものである。以上のように、特別展はまずは予定通り終了した。そして、その後の活動は次のように展開していく。

(4) 市民から出された宿題

展覧会のアンケート調査のなかには、今後山中直治の童謡を市民に定着させてゆくためのアイデアを得るために、次のような設問をした。

（設問）「これまで山中直治の音楽は歴史に埋もれていましたが、今回の特別展によりその存在が広く紹介されることになりました。これからその音楽を住民の皆さんに親しんでいただくために、具体的な方法として何かご意見やご要望があれば、なんでも結構ですからお書き下さい」。これに対する回答の傾向は、

「小・中学生や童謡サークルの発表会や童謡歌手によるコンサートの開催」

「盆踊り・童謡コンテスト・文化祭などのイベントで活用」

「教科書として活用、授業に使用するなど学校教育での普及」

「公共施設・商業施設におけるBGM、夕方の児童の帰宅を促す放送に使用する」

「CD・レコード・カセットテープ類の製作」

「出版物（楽譜集・伝記・小説など）の刊行」

このようなアイディアは、今後直治の童謡を普及していく際に大いに参考になる。それらは、博物館ばかりでなく、市民・学校・行政などのそれぞれのレベルで実施できるものが含まれている。課題は、それらを機能的に調整して連携関係をはかることである。いわば、これらは市民から出された宿題である。その後は、それらをどのように解決するのかを市民からためられることになった。

2. 博物館と学校の連携

市民から出された宿題を解決することは、まず学校での取り組みを支援することであった。直治がかつて教鞭をとった中央小学校（児童数1,086名）では、コンサートに参加したことから音楽の担当教師が関心をもち、校長やPTAの役員たちの理解もあり、様々なかたちで活動が開始された。

(1) 老人ホーム移動博物館のミニコンサート（写真3～4）

特別展の翌年（1997年）2月22日～27日に、野田市内の老人ホーム市立楽寿園で山中直治の移動博物館を行った。老人ホームの移動博物館は全国的にも珍しい。開催の目的は、入所者の中にかつて直治の教え子の方がいたからである。また、多くの入所者は直治と同世代でもあることから、生き甲斐づくり



写真3 老人ホーム移動博物館でのコンサート



写真4 老人ホーム移動博物館の展示をみる人たち

に役立てばよいと考えた。

移動博物館は、展覧会とミニコンサートの2本立てである。展覧会の会場は、入居者が毎日往来する廊下をあてた。また、ミニコンサートは、初日に集会場で開いた。子供たちは、特別展の『生誕90年山中直治童謡コンサート』に出演した小学4～6年生たちである。歌唱指導は音楽担当教員の萌抜文恵さん、シンセサイザー伴奏は同じく石橋昌子さん。老人ホーム側では、石塚新一園長のはからいで事前に「歓迎 移動博物館 山中直治の童謡ミニコンサート」という看板を作成していただき、歓迎ムードに盛り上がりを見せた。

演奏曲目は、いずれも直治の作曲による「こんこん小山の白狐」（作詞：野口雨情）、「つばめ」（作詞：穂積久）、「だんだん畑」（作詞：島田芳文）など11曲。入所者に理解を促すために、作品ごとに解説を行う。主に作詞者の紹介や、直治と特別に親交のあった人物のことや、詞の内容について話した。最後には、「つばめ」を子供と高齢者が一緒になって合唱した。子供たちからの一方通行によるコンサートではなく、高齢者も参加できるようにした。事前に歌詞を配布しておき、歌いたい人には自由に参加してもらい、子供との交流をはかった。子供たちのなかには核家族化で日常生活で高齢者に会うことがあまりない。高齢者の前で演奏したことは、子供たちに新鮮な驚きになったようだ。

(2) 企画展『山中直治先生を偲んで』を開催する

中央小学校の記念館では、1997年2月15日の創立記念日に合わせて、PTAの主催による企画展「山中直治先生を偲んで」が開催された。企画展には、

学校が所蔵する当時の日誌などのほか、博物館からも特別展で作成したパネル類や直治の実物資料を貸し出すなどの協力をした。

私は父兄会からの依頼で、初日に山中直治についての講演を行い、PTAの人たちに理解を促した。また、創立記念日当日は、体育館に全校児童約1,000人が集まり、合唱部による直治の童謡も歌われた。

(3) 歌集を教材として利用する

同校では、直治のコンパクトな歌集（B6判）を作成して、音楽の授業の教材として利用を始めた。それに先立ち、当館では著作権の許可を得る手続きなどの助言協力をした。歌集は、手書きのもので、学年ごとの課題曲6曲を含めて10曲掲載されている。對比地勇校長は、「1年生から6年生までがそれぞれテーマを決めて授業の中で練習をして、卒業までに最低6曲を覚えれば、野田で育った記念になるだろう」と、抱負を語っている。

かつて同校の先生が作曲した作品を歌うということは、子供たちにとってはある種の誇りになるだろう。校内では、休み時間などに、合唱部が歌う直治メロディーも放送されている。私は、時折博物館の前を下校する子供に「直治先生の歌を知ってますか」と声をかけると、「はい」と返事をして曲目をあげてくれる。子供たちの生き生きした顔を見ると嬉しくなる。

(4) 「総合的な学習の時間」に伴うオペレッタづくりの試み（写真5）

やはり中央小学校では、1998年秋に「総合的な学



写真5 小学校の総合的学習で直治の曲を題材にしてオペレッタをつくる

習の時間」で山中直治の童謡を取り入れた課題授業の試みが行われた。私も発表会を見学させてもらった。これは、「鼠の祭」という童謡が題材であった。小学3年生の各クラスごとに、歌詞からイメージしてお話を作り、振付を考えてたり、衣装や小道具を作ったり、楽器（ピアノ・太鼓・リコーダー）を演奏するグループをそれぞれ編成して、一種のオペレッタを創作するものである。つまり音楽以外にも社会・国語・図工などの要素を複合させたもの。教師はアドバイスをするが、あくまでも子どもが主体的に創る。発表会は学年全体でクラスごとに出来ばえを披露した。

発表会では、まず担当教師の谷口芳恵さんが、掲示した直治の顔写真を子供たちに示す。すると「山ちゃん」という喚声があがる。山中直治は子供たちに「山ちゃん」と愛称されていることを知った。子供たちが直治に親近感をもつようになった表れである。担当教師の谷口さんによる「山中直治先生について」の説明の後に、各クラスごとの発表が始まる。お話・歌・おはやし・音楽・踊りが繰り広げられる。4クラスの発表はそれぞれ個性的である。お話がよくできている、踊りがうまい、小道具の御興もそれぞれ工夫がこらされている、ビニール袋を利用して衣装にしているクラスもある。

子供たちの表現力や創造力は予想外に素晴らしく、顔や行動が生き生きしていることも印象的であった。まさに筋書きのないドラマを見る思いであった。そして、何よりも教師たちが子供たちの反響の良さに手応えを感じたという成果は大きい。

「総合的な学習の時間」の目的の一つには、これまでのように教師が一方的に「教える」授業から脱却して、子どもが主体的に授業を創るという発想の転換をはかることがあげられる。また、教師の力量は、子どもを指導的に管理することなく、子供たちを信じて、どれだけ任せられるかにかかっているのではないだろうか。こうして教師と子どもが共感するような授業づくりができれば、閉塞化している学校教育の新地平が見えてくるはずである。

3. 地域内の連携の輪が広がる

市民から出された宿題について、博物館は学校以外との連携や、他の機関や団体が独自に活動を始め

るなどして、様々なかたちで解決がはかられるようになった。

(1) 住民サークルの活動

「山中直治を歌う会」の結成

1997年4月6日、千葉県内の合唱の住民サークルが一堂に会する千葉県婦人合唱連盟合唱交歓会が野田市文化会館で行われた。野田市で開催されるこの会のために、市教育委員会の社会教育課は山中直治の童謡を歌う会を結成して、当日のスペシャル・イベントとして披露する計画を立てた。早速、出演者を市民に募集をしたところ、60名ほどの人たちからの応募があった。歌う会は「山中直治コール・モガ」（モダンガールの意味）として結成され、元中学校の音楽教師の秋葉啓子さんの指導により練習が行われた。そして当日の会場には、県内の合唱団の人たち500名以上が詰めかけた。そこで、山中直治コール・モガは、「つばめ」「こんこん小山の白狐」など直治メロディー8曲を演奏した。

交歓会が終了してから、山中直治コール・モガは解散することになっていたが、会員の多くは継続したい希望をもっていたことから、「山中直治を歌う会」が新しく結成された。会の指導者の秋葉啓子さんは、「上手にやるより楽しい集まりにしたい」という。毎週第2土曜日に市役所のエントランスホールで定期的練習を行い、文化祭などで演奏している。会員は約80名。野田市内ばかりでなく、市外からの参加者もいる。また、中央小学校の合唱部の卒業生で中学生になってからも直治の童謡を歌いたいから入会する。大人たちと共に活動することで、世代間のコミュニケーションがはかられている。

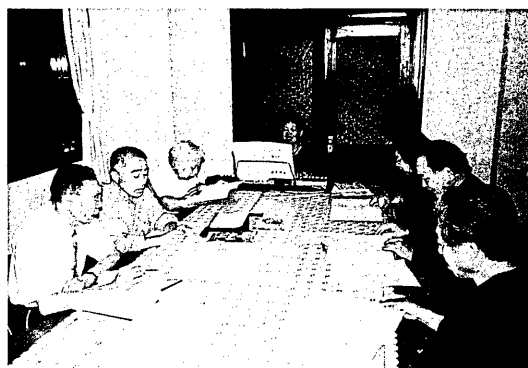


写真6 市民サークル「山中直治研究」の様子

「山中直治研究会」の結成

この会は、直治の研究やその童謡を普及することを目的につくられた。元小学校校長の早川茂さんが会長になり、直治の親類・小学校教員・市役所職員・医師・新聞記者・主婦など様々な職業の人たちからなり、私も会員の一人である。会員約30名。毎月1回、例会をもち、直治の人物研究や作品の解釈、あるいは普及活動の企画などを立案して実施したり、博物館から直治の資料の情報提供を受けて検討会などを行っている。

普及活動としては、これまでにコンサートの主催や共催を行ったり、生涯学習フェスティバル（野田市教育委員会主催）での事例発表なども行っている。また、会報を定期的に発行して、会員相互の交流や対外的に直治の情報発信をしたり、最近では直治のホームページの作成も検討中である。

「童謡の会」によるコンサート

この会は、童謡を愛好する50名ほどの市民サークルである。毎月1回、市役所のエントランスホールでコンサートを定期的に行っている。1997年から、直治の曲を演奏している。例えば、ピアノ伴奏にフルートなどの管弦楽を組み合わせたり、千葉ニューフィルオーケストラのメンバーからなる室内合奏団によるチェロやバイオリンの演奏も行われている。同年秋の市民文化祭では、「郷土の作曲家～山中直治の童謡の世界～」というテーマで、20余名の会員により、「つばめ」「雨だれ電車」「睡蓮」など9曲が演奏された。

「津久太鼓“響”」による演奏

この会は、地元の津久つぐ囃子を後世に伝えることを目的に1994年に設立され、野田の地に深く根ざした芸能文化を研究したり太鼓の演奏をする。会員は小学生から成人まで約50名。練習は毎週、小学校や公民館などで行っている。指導者の染谷雅義さんは明治大学マンドリンクラブの出身である。この会でも、特別展以後にさっそく、直治の童謡に関心を示して、「お祭り」など数曲をアレンジして自らのレパートリーにして演奏している。

(2) 行政内の諸活動

市民サークルによる様々な活動の一方で、野田市の諸機関でも動きがでてくるようになった。その多くは、各担当者が関心を示すことから始まり、博物

館に相談を持ちかけてくる。そこでこちらが協力して実現することになるが、その主体はあくまでも担当部署である。行政の仕事は、まず担当者の意欲が第一である。たとえ予算が少なくとも知恵を出せばかなりのことはできる。活動の大半は担当者の熱意と努力によって実現したものである。

市民への広報活動と市庁舎のBGM

野田市秘書広報課では、担当の北野浩之さんが、直治の童謡を普及する市民の活動や、直治の話題を様々な角度から市報で取り上げる。市報は毎月2回発行されて、自治会を通じて全市民に配付される。例えば、これまでに次のようなコラムで紹介された。フォト短信「全国でも珍しい試み 楽寿園に移動博物館」(97.3.15号)、市民訪問「早川茂さん 山中直治のすばらしさを多くの人に伝えたい」(97.11.1号)、トピックス「童謡コンサートで山中先生の思い出も」(98.6.1号)などである。

あるいは、北野さんはマスコミに対する情報提供をこまめに行っている。特別展以後の様々な活動を逐一マスコミに情報提供することで大きな反響を巻き起こした。その秘訣は、記者との信頼関係を前提として、「目新しさ」「社会貢献」「感動」などが要件となる。こうして直治の童謡普及の活動の様子は地域ニュースとして全国的にも稀にみる質量にのぼっている。

また、市庁舎では訪れた市民向けにBGMを流している。市民から出された宿題の一つに「公共施設におけるBGM」というものがあったが、北野さんはその解決をさっそく実現してくれた。曲は特別展の際に制作したCDから数曲を選曲したものである。こうして野田市民のうち、山中直治を認知する人たちは、特別展の頃におよそ5割であったものが、3年後の1999年には8割にのぼるようになった。

千葉県利根川治水百年記念行事

1999年5月8日に千葉県の事業として利根川治水百周年の記念行事が野田市内の利根川河川敷で行われた。地元では土木課が担当したが、そのイベントの一つとして、住民サークル「山中直治を歌う会」の人たちが「利根川」など直治の曲を演奏した。このように「山中直治を歌う会」は、行政の公式行事にも参加するようになっていく。行政と住民サークルの連携のひとつである。

小学校の社会科副読本に掲載

野田市教育委員会の学校教育課では、2000年度から市内の小学3・4年生が授業で使用する社会科の副読本に山中直治を掲載した。これは2002年度から実施される「新学習指導要領」に基づき、地域に密着した地元の題材を選んだもの。直治の解説は、生い立ちや作曲やコンサートなどの当時の活躍ぶりを紹介している。市内の子供たち1,083人に配付された。さっそく中央小学校の4年生の子どもたちのうち、自由研究で直治のことを取り上げたグループが博物館に訪れた。子どもたちの質問に対して副読本に掲載していない話や実物資料を見せると、子どもたちは熱心にノートをとっていた。子どもたちからは、後日勉強になったというお礼の手紙をもらい嬉しかった。

プロのコンサートで演奏

野田市文化会館では、自主公演を定期的に開催して市民に音楽を普及している。1997年7月13日にソプラノ歌手『本宮寛子の楽しい音楽の旅』というコンサートにおいて、担当者の野本忠夫さんがリクエストして直治の曲を演奏曲目に入れてもらった。会場には、市内の小中学生をはじめ市民1,000人ほどが入場した。初めてプロが演奏する直治の曲に私も聴きほれてしまった。日常的に直治の曲を演奏する子どもや大人たちにとっても、その演奏ぶりは参考になったようだ。その後も野本さんは、文化会館で演奏するプロの音楽家に直治の曲をリクエストした。1998年5月31日にはタッド・ウインドシンフォニー（プロの吹奏楽団）、12月13日にも東京ヴィヴァルディ合奏団の演奏でも直治の曲が演奏された。いずれも、プロの人たちが直治の曲をどう理解するのかを知ることができたし、その評判はしばらく市民同士の話題にもなった。

公民館の山中直治講座

1999年10月には野田市南部公民館の自主事業として「山中直治講座」（全4回）が開かれた。社会教育主事の田所祐史さんによる企画である。企画や実施については、学校・社会教育課・博物館・秘書広報課とも連携をはかった。自ら直治のトレードマークの山高帽子をかぶり司会をする熱の入れようであった。平日の昼間の時間帯であることから、主婦などが28人が参加した。講師は、これまでの活動の関

係者ということで、私も協力した。なかでも4回目は、南部小学校の子供たちが小学校の音楽室で吹奏学部と合唱部による演奏を披露した。南部小学校は直治が卒業した小学校である。それは、直治の童謡を媒体にして地域の大人と子供たちが交流する場になった。地域の人たちが地元の小学校を訪問することは、閉ざされがちな学校を開放するうえで大切である。

(3) 博物館の活動

特別展以後にも、博物館としては市民から出された宿題を解決するために次のような事業を行ってきた。

常設展示コーナーの設置

1998年1月に、当館の常設展示室に山中直治の展示コーナーを設置した。見どころは、なんといっても実物資料である。直治の直筆楽譜に書かれた、同じ大きさで整然と書かれた音符からは、几帳面な人柄や性格が伝わってくる。小学校の書道の作品も達筆である。直治に所縁の実物資料をみると、童謡の背景が理解できる。

このコーナーは子供たちがよく見に来る。小学校の副読本に掲載されたことから、子供たちの関心は一段と高くなった。学校ごとの博物館見学でも、「あっ、山中直治先生だ」といって、展示コーナーに子供たちが集まる光景をよく見かける。いまでは、当館には不可欠の展示となっている。

山中直治童謡曲集の刊行

1998年2月には『山中直治童謡曲集』を刊行した。直治の作品は、生前に刊行した童謡曲集と、特別展図録の掲載分があるだけで、大半は博物館の所蔵資料として未公表のままとなっていた。市民が直治の童謡を演奏するためには、全て作品を公開することが必要であった。そこで早速、特別展の次年度の予算要求で印刷費を計上したところ、市の企画財政部では市民が普及活動に積極的に動きだしている状況を踏まえて、予算をつけてくれた。その後、毎年童謡曲集を刊行して、2001年3月までに4冊となった。直治の童謡普及に参加する市民は、この曲集をもとに活動をしている。

企画展「山中直治の童謡を描いた童画の世界」とミュージアム・コンサート

毎月1度の山中直治研究会の席上で、会員の本橋

尚徳さんが、「今、こんなものを描いているんですよ」と数枚の絵を私に見せてくれた。それは、山中直治の童謡からイメージしてコンピュータグラフィックで描いた数枚の童画であった。一目見て、興味を抱いた私は、さっそく本橋さんに博物館で「童画展」をやりませんかと打診したことが、この企画展の発端となった。それ以後、本橋さんは企画展に出品する作品を精力的に製作して、1年ほどかけて50点を完成させた。プロのイラストレーターとしての仕事をする一方、余技として始めた童画の製作はだいぶ苦勞されたようであった。

企画展は、1999年11月13日～12月5日に行われた。来館者は約2,700人にのぼった。その感想は、「はくりよくがあり、きれいでよかった」(8才女子)、「温かさのあるやさしい絵だと思いました」(29才女性)、「音楽の展示を絵で表現するアイディアは素敵だと思いました」(52才女性)、「子供の頃がよみがえるようでした」(60才女性)など好評であった。

また、会期中には市内在住の川鍋節雄さんによるミュージアムコンサート“野田の直治・花巻の賢治”を開催した。川鍋さんは、プロの劇団の歌役者。劇団が宮沢賢治の作品を手掛けていることから、川鍋さんの発案により直治と賢治の作品を合わせた内容となった。直治と賢治は同時代人であり、また学校教員でもあり、作品は子供の心や自然を描いたものが多いという共通がある。最終日の午前と午後の2回、展示室内で公演をしたところ約300人の来場者があった。

4. 市民運動としての山中直治の童謡普及活動

これまで、学校や住民たちが直治の童謡を受け入れてから、それぞれの場で活動が行われてきたこと、また博物館としてもその支援活動を行ってきたことを述べてきた。次の段階としては、それらが相互に連携して、さらに大きな活動に発展した。地域づくりに欠かせない子供たちや住民とのコミュニケーションの促進がより一層すすむことになった。

(1) 住民コンサートの開催

1999年3月14日に野田市文化会館において、『山中直治の童謡と谷内六郎ふるさとの四季』という住民コンサートが開催された。会場や経費は野田市が負担したが、内容は住民たちの発案による手づくり



写真7 住民たちの手づくりによる山中直治の住民コンサート

コンサートとなった。

コンサートの企画や構成は、これまで直治の童謡を演奏してきた少しでも多くの人たちに呼び掛けをはかり、多彩なジャンルから直治の童謡を演奏することにした。出演団体は、山中直治を歌う会、野田市立第一中学校合唱部、野田市立中央小学校合唱部、西武台千葉高等学校吹奏楽部、下総之国津久太鼓「響」、沼南フィルハーモニーオーケストラである。野田市外の人たちに呼び掛けて「山中直治の童謡をいっしょに歌いませんか」という個人参加者の募集をしたところ、各地から40人ほどの応募があった。また、谷内六郎が描いた子供たちの姿や自然の絵を舞台の脇でスライドで見せることで演出にも配慮した。

コンサートの入場者は1,000人を越える盛況ぶりであった。エントランスホールには、博物館も協力して山中直治と谷内六郎の展示コーナーを設けて、解説や写真パネルなどで来場者の理解をはかった。

会場では、まず直治が昔採譜した“かごめかごめ”からスタートした。子供たちによる歌や遊びの様子を導入にした。それに続き、季節ごとの歌が繰り広げられた。中央小学校合唱部の児童たちや山中直治を歌う会の大人たちの合唱は、その数年間に相当上達した。子供たちの歌声には愛らしさが良く出ている。大人はしっとり歌い上げる。曲の合間に谷内六郎の作品が舞台の両袖のスクリーンに大きく映しだされて郷愁を誘う。西武台千葉高等学校吹奏楽部の演奏は、いずれも部員たちで編曲したもの。部員の自主性を尊重する教師の姿勢が伝わる。沼南町フィルハーモニーオーケストラは沼南町と近郊の子ども

や大人たちによって編成され、プロの交響楽団の石田常文さんが指導している。直治の作品の中から季節にちなむ7曲を選び“四季”というタイトルでメドレー演奏をした。あるいは、津久太鼓「響」は軽快なリズムと迫力により“汽車のマーチ”を演奏した。結成されてまもないものの、若者の姿が目立つ。一見調和しそうな童謡を見事にアレンジして自らのものとしてしまった。いずれも会場から大きな拍手がまき起こった。フィナーレの“お祭り”では、参加者約200人全員が舞台に立ち、子供御輿も繰り出し、会場と一体になり手拍子を取りながら大合唱が行われて感動的であった。

その後、住民コンサートは2000年10月にも市制50周年の記念事業のひとつとして開かれるなど、毎年継続するようになっている。

(2) 山中直治研究会によるCD製作と商店街の活性化

研究会を発足した際から懸案となっていたCD製作が1999年11月に実現した。費用は全て研究会の負担による。私も研究会の一員として、その企画や製作に携わった。これまでのCDは博物館から出したコンピューター・ミュージックだけであったので、以前から子どもたちの歌入りのCDを望む声があったからである。

製作は、研究会を中心として中央小学校や児童たち・市役所・博物館・市民が連携した、全て手づくりによる。歌は中央小学校の合唱部の子どもたち。録音に先立ち学校では特訓が行われた。3～6年生の総勢60人。録音は同年3月末日の1日だけ市のホールを借りることができた。録音日は僅か1日しかなかった。4月になると6年生は中学校の入学式がある。合唱部も部員が入れ替わる。すると練習をまたやり直さなければならない。子どもたちにCDの説明をすると、緊張感が出てきたことが分かった。録音は研究会メンバーの山崎健一さんが担当する。私も一緒に演奏をチェックする。曲目によっては10回ぐらい歌い直した。録音中は物音一つたてられない。子どもたちは緊張して疲れたようだが、それでもよく頑張ってくれたおかげで、予定した22曲全てを録音できた。

その後、山崎さんの自宅で録音の調整作業をしたり、CDジャケットの作成などを経て完成した。

CDができたのは子どもたちの努力によるものなので、ジャケットには全員の名前を入れた。それが、子どもたちの将来にとって誇りや自信となる願いを込めたものである。

販売は、通信販売のほかに地元の商店に置かせてもらうことにした。商店街は全国的に活気がなくなっている、雰囲気づくりになればよい。商店は、和菓子・煎餅・喫茶・蕎麦・眼鏡・仏壇・衣料品・書籍・文房具や、神社まで応じてくれた。野田に訪れた人たちがお土産に買ってくれば、それも地元の経済効果になる。市民の文化活動が地域経済の活性化にもつながることが期待される。

5. 結語

博物館で特別展が行われてから4年余りが経ち、山中直治の童謡が市民による文化運動に発展するようになってから、地域の人たちの日常生活はどのように変化したのだろうか。

それは、以前と比べて必ずしも劇的に変化したものではない。例えば、よく「町おこし」運動にみられるように、観光の売りものにして華々しく宣伝して市外から観光客を呼び込み、町の景観が変化した訳ではない。全国で見られる、そうした事例は、行政や地元の観光協会などが主導する地域経済の振興策による。

しかし、野田では社会教育の立場から取り組んでいる。町を歩いても華々しさは見られないが、市民生活にはある種の変化が生まれるようになってきた。その第一は、その普及活動を市民・行政・学校・博物館などが連携しながら市民が中心となってくつてきたことである。その結果、参加した人たちの自信や責任のようなものがそこに生まれている。近年いわれる「自分さがし」のようなものかもしれないが、直治の童謡を普及する共通した目標に市民が参加することで、「個」の確立につながることを期待している。

根本崇市長は、1999年3月の住民コンサートの挨拶で、博物館の特別展を契機として始まった市民の普及活動に触れて、「文化が生まれたままではそのままになってしまう。それを育ててくれる担い手の人達がいて、初めて文化というのは大きく花開く」と、市民が主役となっている様子を評価している。

市長の発言は、地方分権の行政においては、市民が自立することの必要性が含まれている。例えば、これまでのように行政に依存心の強い市民では、もはや地方行政は財政的にも成り立たないからである。やれることは自らやるような市民の自覚が望まれる。童謡の普及活動は市民の自立的な活動の一つになっている。

また、これまで野田といえば醤油をイメージしてきたが、新たに山中直治の童謡が加わることで、地域文化の幅ができたことである。市民の特に若い世代には醤油のイメージに抵抗をもつ人たちがいるが、童謡によって地元に親しみをもつ人たちも現れてきている。

なお、学校教育との関わりの面でも、直治の童謡の普及活動は地域の教育力の増進に役立っている。これも近年いわれているように、これまでの学校だけの教育から、地域が一体となって子供たちを育てる観点からも多彩な取り組みに発展している。学校内では、直治の童謡は音楽の授業やクラブ活動に導入されたり、「総合的な学習」への応用が試みられたり、社会科の副読本にも掲載されるようになった。また、学校外では、大人たちとの交流が生まれるようになった。老人ホームでは高齢者との交わりをもち、市民コンサートでは大人たちと共にコンサートをつくり、市民サークル「山中直治を歌う会」では中学生たちも参加している。CDの製作も大人との共同作業であるが、むしろ主役は子どもたちであった。以上のことは、学校が地域の様々な人たちと連携することで生まれた地域の新しいコミュニケーションである。

2002年度からの教育改革として、学校現場では新学習指導要領に基づいた新しい教育が開始する。しかし、それによって、今日問題となっている「学級崩壊」「いじめ」「登校拒否」「自殺」などがすぐに改善できるとは思えない。ある意味では、学校側には限界のようなものがあるように思われる。これからの教育は、明治時代以来の近代教育による学校中心の教育から、「地域が子どもを育てる」ような教育に転換していくことである。野田で行われている山中直治の童謡の普及活動は、21世紀の学校教育を考えるうえからも示唆に富むものといえる。

※なお本報告は、2001年6月、第50回読売教育賞（地域社会教育活動部門）優秀賞を受賞したものである。掲載にあたっては、読売新聞社編集局・文化関連事業事務局から承諾をいただいた。記して感謝申し上げる。